

Title	古代ロシア語形容詞の長語尾・短語尾両形の職能と形容詞の種類的相关について
Author(s)	山口, 巖
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 (1998): 60-72
Issue Date	1998-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/65835
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

古代ロシア語形容詞の長語尾・短語尾両形の職能と 形容詞の種類的相关について¹

緒 論

§1 従来形容詞の長語尾及び単語尾両形の使用は、形容詞の修飾する名詞の指示する対象が特定のものとして、一義的に確定さるべきものであるか否かに依存すると考えられて来た。

この論拠としては、主として次の二つが考えられる。1) ギリシア語原典より翻訳せられた古代スラヴ語の宗教的文書において、ギリシア語の「冠詞 + 形容詞 (+ 名詞)」の構文に、古代スラヴ語の形容詞長語尾形が多く対応するとみられること、並びに 2) 長語尾は対応の短語尾形に指示代名詞 *и, я, е* が付加されて成ったと考えられること、がこれである。

第一の場合、詳細に検討してみれば、ギリシア語における、冠詞を伴った形容詞が、古代スラヴ語の短語尾形に対応する場合も、しばしば認められるところであり、一般に信ぜられるように、上述の対応を原則として措定することができるほどには、一貫したものでないことを指摘する必要がある。

第二の場合、形容詞長語尾形の原型として *добръ и (мужь)* を考えれば、この指示代名詞部分 *и* の果す役割が問題となる。若しこれを *добръ* と共に名詞 *мужь* を並列的に規定すると考えれば、*добръи мужь* は「善きその男」となり、従来の説の如く、長語尾形の職能は、名詞の指示する対象が特定のものであることを示すところにあるとせねばならないであろう。逆に従来の説は、意識すると否とに拘わらず、指示代名詞部分の役割をかかると考えていたことを示している。しかしながらこの場合には、この *и* が何故に形容詞と融合せねばならなかったか、また何ゆえに常に形容詞に後置されねばならなかったかが明らかにされねばならないであろう²。従来の説の内包するこのような論理的欠陥は、かのミクロシチをして「指示代名詞の *и* は、形式上は形容詞についているが、機能的には名詞を修飾している」³ というような苦しい弁明をすることを余儀なくせしめ、あるいはマトヴェーエヴァ・イサーエヴァをして、「この命題は、名詞の定性あるいは不定性

¹ 『古代ロシア研究』第4号 昭和39(1964)年3月 145-166頁。

² Ивао Ямагучи, О функциях полной и краткой форм имен прилагательных древнерусского языка, 『言語研究』vol.41, 1962, pp. 29-30.

³ F. Miklosich, *Vergleichende Grammatik der Slavischen Sprachen*, Bd.4, Syntax, Heidelberg 1926, p. 125.

の意義が、それに形容詞修飾語がついた場合にしか表現されないということだけをみても疑わしいものとなる。一方他の場合にあっては、名詞につく定冠詞のいかなる痕跡も、古代ロシア語には存在しないのである⁴と断ぜしめる原因となっている⁵。

§2 これに対して若し *и* を *добрь* と機能的に一群とすればどうであろうか。 *добрь* は *и* を規定し、この語群が名詞と同格に立つに違いない。しかも形式と機能の並行性は、この場合にも完全に保つことができる。

印欧語においても形容詞は初原的には名詞と同格に立つものであった可能性が濃く、その名詞に対する高い独立性はラテン語などにおいてもみられる通りであるが、言語によっては例えば英語の補語 complement のように、一定の統辞論的条件の下に、この種の同格関係を保持するもののあることなどを勘考すれば、スラヴ語の形容詞長語尾形が、このような同格関係の形態論的表現であったとしても、強ちあり得ぬ想定とするには当らないであろう。

このようにすれば *добрыи мужь* は *добрь и мужь* 即ち「善きもの即ち男」となる。形容詞によって表される意義内容は、名詞の指示する対象の本来的性質を示すことになるのである。

このような作業仮説を実例について種々検討した結果、両形の職能を次のようなものとするに至った⁶。

長語尾形は、形容詞によって表される意義内容と、名詞によって表される意義内容との関係が、話者の意識において発話 utterance 以前に既に設定されているか、あるいは既に設定されたものとして示そうとする心的傾斜の上に使用される形式である。

短語尾形はこれに反して両者の意義内容の間関係が、発話の際に、あるいは発話によって、初めて設定されたか、あるいは初めて設定されたものとして示そうとする形式である⁷。

このような定義からすれば、長語尾形が既に言及されたもの、あるいは一義的に確定し得るものに使用される場合があることも当然であり、現代ロシア語において長語尾形が述

⁴ A. В. Матвеева-Исаева, *Лекции по старославянскому языку*, Учпедгиз 1953, стр. 108-109.

⁵ 長語尾形が短語尾形に指示代名詞あるいは承前代名詞 *pronoms anaphoriques* の **ji*, **ja*, **je* が付加されて成ったものであることは、殆んど疑いがないが、これはあくまで確信にすぎず、これはスラヴ語と近いバルト語派において同様な現象が極めて transparent な形で存在することからの類推であり、学問的には未だ推定にすぎないことを特に指摘しておく必要がある。(バルト語に関しては、例えば З. П. Зинкевичюс, *Некоторые вопросы образования местоименных прилагательных в Литовском языке*, *Вопросы славянского языкознания*, вып. 3, М. 1958, стр. 50 & seq.) しかもスラヴ語の場合、その成立の過程については未だ数多くの疑点を残しているのである。(cf. Gunnar Gunnarson, *Recherches syntaxiques sur la décadence de l'adjectif nominal en slave*, Paris 1931, chap. II, pp. 12-19.)

⁶ И. Ямагучи, *op. cit.*, p. 29.

⁷ *ibid.*, p. 50.

語となる場合、恒常的な性質を示すことなどもよく説明される。また長語尾形が何故短語尾形を名詞規定語の位置から駆逐し、何故後者が専ら述語としてのみ使用されるに至ったかを説明することも容易である。

従って長語尾形は形容詞ならびに名詞の示す意義内容相互の関係が疑いないものであるという意識に支えられ、短語尾形は発話の際に初めてこの関係が設定せられたものとするところから、予期せざること、乃至は予想を越えたことを表現する場合にも使用せられ、印象の鮮烈さを背景としているといい得る。

以上のような前提のもとに再び実例を分析した結果は、極めて満足すべきものであった。従来の説によっては、例外とせざるを得ないものも、概ね説明することが可能となったからである。

§3 ここで以上に述べた定義が従来のもとの本質的に異るところは何かを明らかにしておく必要がある。これは従来定義が長語尾形と短語尾形の職能をそれが修飾する名詞と名詞の指示する対象との関係によって規定するのに対し、新しい定義はこれを形容詞と名詞の意義内容間の関係によって規定するという点に要約できるであろう。

即ち従来定義によれば、例えば「赤い机」というとき、「赤い」という形容詞が何れの形をとるかは、「机」が特定のものであるか否か、換言すれば「机」という語の示す意義が、言語外的な対象である特定の机と特殊なつながりを有するか否かということに依存していたのに対し、新しい定義では、「机」と「赤い」という二つの意義内容の関わり方によると考えるのである。従ってこれは、明らかに、言語的平面の内部における現象として把握される。これに反して従来定義によれば、「定性・不定性」の形態論的表現手段の保有者である形容詞とは、全く異ったところで、その表現手段の選択が行われるという不合理が生ずる。既述のマトヴェエヴァ・イサーエヴァの疑問も、深くこのような本質に触れるものであった⁸。

このように両形の選択の理由を形容詞と名詞の意義内容相互間の、言語内的な関係に求めることによって初めて、形容詞自身の有する語彙的意義、あるいは形容詞の所属する種類と、両形の選択との内的連関性の存在が、理論的にも可能となる。

従来定義によれば、形容詞自身の有する意義は両形の選択に関与しないはずであるから、形容詞の意義による類別(例えば性質形容詞、関係形容詞、物主形容詞等)と両形の選択との関連は、それが現実存在するにも拘わらず、理論的根拠を見出すことができない。

⁸ ミクロシチの「この故に又これらの形(長語尾形)と、特定のものとして言及されあるいは単にかかるものとして考えられた名詞の結合が、発話行為に際してのみではなく、それ以前にすでにかかるものとして考えられていたことを示している」(F. Miklosich, *op. cit.*, p. 125)という主張は、極めてこの定義と似通っているが、この主張の前提をなす「複合形(i.e. 長語尾形)は形容詞と名詞の結合によって既述の、あるいは周知の対象が表示されることを示す」という点で、全く異ったものである。しかし何れにしてもミクロシチの所説は、*определенность* と *неопределенность* の対立というが如き浅い理解で計ることのできないゆとりのあるものであったことは、疑いない。ミクロシチの真意は、もっと深いものであった。

本 論

§4 既に述べたように、長語尾形と短語尾形の選択を決定するのは形容詞と名詞の意義内容の関わり方であるとする立場から、両形の選択に当たっての有力なファクターとして形容詞の種類が浮び上がってくる。性質形容詞、関係形容詞等の区別も、結局は意義に基づくものに外ならないからである。この意味で、形容詞の種類は、意味論的・語彙論的なカテゴリーであると言いうるのである。

定義から形容詞と名詞の意義内容の関わり方が問題なのであるから、この関わり方が形容詞の種類に応じて、如何なるものとなるかという点に関して、考察を進める必要がある⁹。

I. 形容詞の種類

(1) 性質形容詞

§5 今例えば「赤い花」というとき、「赤」という性質は、「花」の有する属性として立つのであり、「赤」は「花」の属性であると言うことができる。今便宜上「花」を無数の諸属性の束と考えれば、「赤」はその中の一つであり、従って「赤」は「花」に属するあるいは「含まれる」ということができよう。形容詞の意義内容を A 、名詞の意義内容を N としてこの関係を $A \subset N$ (A は N に含まれる) と表すことにする。

一方 N は今述べたように無数の A (i.e. $A_1, A_2, A_3, \dots A_n$) の束であるから、 N を中心として考えれば、どの A を選ぶかは話者の主観にかかっている。即ち選択の可能性が生ずる。所謂 redundancy である。この可能性を [] によって表せば、性質形容詞の場合、次の関係が成立する。

$$[A_1, A_2, \dots A_n] \subset N$$

これが性質形容詞の基本的な図式である。

(2) 関係形容詞 I

§6 関係形容詞の場合は、性質形容詞に比べて事情は遙かに複雑である。

名詞によって表される事象が形容詞によって表わされる事象の一部である場合がある。

例えば городъный ворота 「城門」 55, 30, 90v; стена градъная 「城壁」 69v; столпы кивотныя 「聖像壇の柱」 70; прѣграды олтаръная 「聖卓の聖障」 70 etc.

§7 名詞によって示される意義内容が、形容詞によって示される意義内容の特殊な一面を表す場合がある。

⁹資料は *Новгородская первая летопись старшего и младшего извода*, М.-Л. 1950. のシノダリ本からのものである。

例えば *божия благодать* 「神の恩寵」 41v; *божия сила* 「神の力」 85v; *божия милость* 「神のいつくしみ」 49; *прѣмудрость божия* 「神のいと深き智慧」 118v; *помысль божии* 「神のおもんばかり」 86v, 168; *крестная сила* 「十字架の力」 37, 141, 145v etc.

上の例において例えば *благодать*, *сила*, *милость* etc. はすべて「神」なる存在の有する特殊な面を表しているにすぎない。従って少くとも意味的にはより重要なものは名詞というよりはむしろ形容詞のによって表さるべき意義内容である。

このことはコンテキストに一定の操作を加えることによって比較的容易に確かめることができる。例えば、

a. он же въорженъ **силою крестною** не хотѣ и слышати ласкы отца своего. 141

「かれは十字架の力によって身をよろい、おのれの父の優しい言葉を聞こうとだにしなかった。」

という文において、*силою крестною* を *силою* によって置き換えれば、「かれは力によって身をよろい」となり、*крестомъ* によって置換すれば「かれは十字架によって身をよろい」となる。何れがよく原意を伝えているかは、おのずから明らかであろう。其他の例も同様である。

b. нъ **божиею милостию** не бысть пакости въ людехъ 49

「しかしながら神の慈悲によって人々のあいだにわざわいは起らなかった。」

cf. нъ *милостью* 「しかしながら慈悲によって」; нъ *Богомъ* 「しかしながら神によって」.

§8 次に形容詞によって示される事象が名詞によって表される行為を行い、あるいはその事象を結果として生ぜしめるところの行為の主体として立つ場合がある。

例えば *казнь божия* 「神の下し給う罰」 138, 151; *судъ божии* 「神のさばき」 157v; *божие повелѣние* 「神の命令」 126, 126v, 153; *гнѣвъ божии* 「神の怒り」 4, 96v, 113v, 121v; *божия помощь* 「神のたすけ」 32v, 102, 117, 139; *божие поущение* 「神のゆるし」 125, 140v, 159; *божия воля* 「神の意志」 16v, 77, 77v etc.

この場合にも同様の手続きを適用すれば、§ 7 とほぼ同じ結論が得られる。但しこの場合名詞あるいは形容詞の何れを以て置き換えても、当初の意味は多少とも大きく歪められる。例えば

v. ... а въдуче **казнь божию**, в покояния мѣсто горшее зло створиша. 151

「しかるに彼等は神の(下し給う)罰を知りながら、悔い改めるかわりに更に悪事を重ねたのである。」

これを казнь で置き換えれば、「罰を知りながら」、Бога で置換すれば「神を知りながら」となる。前者の場合が「罰一般」乃至は人為的な罰を予想せしめるのに反し、後者の場合には「神を怖れず」の意となる。後者が未だ道徳的な意味合いを保存するのに対し、前者はこれを全く失っている。従って原意は後者の場合によりよく保存されていると言える。同様にして、

г. ...и побѣдиша я божию помощью. 139

「しかして彼等は神の助けにより、彼等を打負かした。」

cf. и побѣдиша я помощью 「彼等は助けによって彼等を打負かした」；и побѣдиша я Богомъ 「彼等は神によって(神のおかげで)彼等を打負かした」。

§9 次に形容詞によって表される事物が名詞によって表される事象の対象として示される場合がある。例えば гоголныи ловци 「鴨の猟師」148; заячии ловци 「うさぎの猟師」148; зажжение градное 「町の炎上」66v; крѣстное цѣлование 「十字架の口づけ」162v, 112v; церковное здание 「教会の建立」42v etc.

д. ...и нача здати церковь ...а всего дѣла церковнаго здания днии 70. 42v

「しかして彼は教会を建てはじめたところで教会建立のすべての事業は70日であった。」

これを всѣго дѣла здания とすれば、「建設のすべての事業」となり、всѣго дѣла церкви とすれば「教会のすべての事業」となる。このようにしてみれば、前者の方が一見原意をよく伝えるもののようにも思われるが、教会の建立は、他の建物の構築とは全く異ったものであり、定礎式、浄めの式¹⁰など教会建立にまつわる特殊な行為が必然的に伴うことを考慮すれば、後者を取る可きであると考えられる。крестное цѣлование も同様であって、十字架への口づけは当時の誓約の形式であり、十字架への誓約に外ならない。重要なのは「十字架」である。

§10 最後に名詞によって表される意義内容が形容詞の意義内容と同じものであって、これを異なる観点から言い直したに過ぎない場合がある。例えば каль грѣховныи 「罪の泥沼」125v; царствие небесное 「天の王国」113, 119; царство небесное 「同じ」90 etc.

この場合にも例に見られるように、重要な意義を担うのが形容詞によって示される意義内容であることには変りがない。

¹⁰石造の教会の場合 положить、木造の場合は срубити という動詞が使用され、これらは、起工の儀式をも含めて「建立する」という意味に使用されていたらしい。浄めの式は святити であった。

§11 以上の外、形容詞と名詞の意義内容の独立性が漸次弱化し、一つの定まった表現として固定化の方向を辿りつつあるものがある。この場合はそれぞれの段階に応じて極めて雑多である。

例えばエピテットに近い *вседенная служба* 「日毎の勤行」 58; *цесарь небесный* 「天帝」 117; *луна небесная* 「空の月」 17v; *служебное евангелие* 「勤行のための福音書」 70v etc. の如きものから、形容詞と名詞の意義内容の融合を伴う *словѣсное овьца* 「言葉のある小羊、人間」 109; *зборная церкы* 「大教会議を行う本山教会」 125; *день недѣлныи* 「無為の日、日曜日」 169; *отець духовныи* 「魂の父、僧の敬称」 155 etc. の如きものまでである。次の諸例は例外ともみられるが、恐らく決まった表現として定着されていたものであろう。*нощное стояние* 「夜のたたずまい、夜のいのり」 106; *ночьнии сторожь* 「夜番」 87v; *сторожь днѣвнии* 「昼の番人」 87v; *сторожь двѣрныи* 「戸口の番人」 39 etc.

§12 以上見てきたところから、関係形容詞の基本的図式 $A \supset N$ と考えてよいように思われる。 N は A によって規定される場、乃至は状況の構成部分としてのみ初めて独自の意義を有し得るのである。

このように考えれば A が多くの異った N を含み得るのは明らかであるから、次のような図式が得られる。

$$A \supset [N_1, N_2, N_3 \dots N_n]$$

次の例もこのような観点から説明されるべきであろう。

e. ...внезапу померче солнце яко на час ...и тма бысть яко в зимнюю
ночь ... 162

「突如として太陽が一刻ほどかげり闇は冬の夜におけるが如くであった。」

この場合、ノヴゴロドの地にあつては、闇というイメージと結びつくのは「夜」でなくして「冬」であったと解すべきである。

(3) 関係形容詞 II

§13 古代ロシア語において、材料、材質を表す一群の関係形容詞が、現代語の場合と異り、しばしば短語尾形を以って使用されていたことは、よく知られている。例えば

ж. а Пльскове святого Спаса церковь създа камяну. 29

「ところでプスコフにおいて彼は石造の聖なる救世主の教会を建立したのである。」

з. ...и церкви сърубиша 2 деревянѣ на Търговищи. 14v

「しかしてトルゴヴィシチェに 2 つの木造の教会を建立した。」

и. и ядяху люди листь липовъ, кору березову.

12

「しかして人々は、菩提樹の葉、白樺の樹皮をすら喰べたものであった。」

これらの例、特に最後の例においては、短語尾形の職能から来る文体論的効果が顕著に認められるが、このことは、これら材質をあらわす形容詞に何故しばしば短語尾形が現れるかを解明するものではあり得ない。従ってここでも先ず、これらのカテゴリーに属する形容詞の意義内容と名詞の意義内容のかかわり方を明らかにする必要がある。

例えば「木の机」という表現を考えてみれば、「木」と「机」とは同一のものの異った面にすぎない。「木」はその材質の面を示し、「机」はその機能の面を表している。従ってこれは $A = N$ と考えられる。

しかしながら「机」は必ずしも「木」でなければならぬわけではない。ここに redundancy の生ずる余地がある。従ってこれは次の図式で示される。

$$[A_1, A_2, A_3 \dots A_n] = N$$

このようにすれば、これは性質形容詞とも、関係形容詞とも異っている。

(4) 物主形容詞

§14 物主形容詞の場合、例えば「甲の本」という表現についてみれば、「甲」の所有にかかるものは無数に存在し得、「本」を所有し得る人物もまた無限である。従って「甲」と「本」との関係には、他の場合と異り、いかなる限定もない。「かかる物がかかる人物に必然的に所属せねばならぬ」ということはない。「甲」と「本」との結合はいわば偶然的なものと言ってもよいであろう。

この故に A と N とは多対多の対応を示すはずである。仮令 A あるいは N を決定したとしても、それは一対多の対応になるに過ぎない。これを仮に $A : N$ として表わせば、物主形容詞の基本的な図式は次のようなものとなる。

$$[A_1, A_2, A_3 \dots A_n] : [N_1, N_2, N_3 \dots N_m]$$

II. 形容詞の種類と長語尾短語尾両形の使用との関係

§15 定義によって短語尾形は形容詞の示す意義内容と名詞によって表わされる意義内容との間の関係を発話の際にはじめて設定されたものとして示す形式であるとする。従ってこれらの意義内容相互間の関係は、発話以前に予め設定されてはいない。この故に短語尾形は A に redundancy の存在する場合、即ち所与の N に対し A の選択の余地が存在する場合にのみ使用され得ることは明らかである。

換言すれば、短語尾形の使用の条件は、所与の N に対して $[A_1, A_2, A_3 \dots A_n]$ が存在することである。

§16 これに対して長語尾形は、定義によって、このような意義内容間の関係を発話以前に既に定まったものとして示そうとするものであるから、所与の N に対して一義的に定まった A が存在するか、逆に一定の A に対して一義的に定まった N が存在することがその使用の条件となる。若し A, N の何れか一方、あるいはその両方共に redundancy が存在する場合、 A, N の関係が一義的なものと認識されるためには、何等かの条件(多くは言語外的な)が必要となろう。§2 で言及した所謂既言及性 *вышеуказанность* あるいは定性 *определенность* も、実は N に於ける redundancy を排除するのに役立つという点でこのような条件たり得るのである。(しかし乍らこれは A に於ける redundancy を排除するものではないという点で、両形の選択のすべてを決定し得るものでないことも明白であろう)。

以上から明らかなように、言語的な面からみた redundancy の存在は、現実に長語尾形を使用することの妨げにはならない。一群の A から任意の A を選び、一群の N から任意の N を選択して一対一の対応を作る何等かの条件が存在するか、あるいはこのような対応を作らしめる可き条件が少くとも話者の意識の中に存在することを、対話者に伝達せしめようとする場合に長語尾形を使用し得るのである。然しながら逆に言語的側面からみて redundancy が存在しない場合、形容詞は必然的に長語尾形をとらざるを得ない。

(1) 性質形容詞

§17 性質形容詞の図式は既に見たように (§5) $[A_1, A_2, A_3 \dots A_n] \subset N$ であり、また短語尾形の使用の条件は所与の N に対して $[A_1, A_2, A_3 \dots A_n]$ が存在することであるから、性質形容詞は、すべて短語尾形をもって使用することが可能である。長語尾形をとるのは、何等かの外的条件によって、 A の有する redundancy が排除せられたときである。

(2) 関係形容詞 I

§18 関係形容詞 I の基本的な図式は §12 においてみた通り $A \supset [N_1, N_2, N_3 \dots N_n]$ であるから、 N_p が与えられた場合、 A と N の関係は一義的に定まる。この形容詞が専ら長語尾形のみをもって現れるのは、この故に外ならない。

(3) 関係形容詞 II

§19 関係形容詞 II の基本的な図式は $[A_1, A_2, A_3 \dots A_n] = N$ である (§13)。従って §15 の短語尾形の使用の条件を満すことができる。この場合短語尾形は A の選択の余地が明らかである場合にしばしば使用されるのは当然である。

この故にシノダリ本において *камень* 「石造の」という語が特にしばしば使用されてい

ることも、当時教会は石造の場合と木造の場合とがあったことから、*деревянь*「木造の」という語との間の *redundancy* が特に明確であったためとしてよく説明され得る。

これに反し *желѣзныи полкъ*「鉄の如き軍勢」(144v); *желѣзныи замокъ*「鉄壁の城」(66) の場合は比喩的に使用され、*A* に選択の余地がない。長語尾形の使用される所以である。

Н. И. Толстой は、この種の形容詞が短語尾形をとり得ることにに関してこれらが意義的に性質形容詞に近いからであると説明している¹¹。Толстой は従来の定説に基づいているのであるから、何故性質形容詞に近ければ短語尾形をとりうるかの説明が必要となろうが、このことを別にしても、「意義的に近い」というのは単なる印象に過ぎない。

(4) 物主形容詞

§20 物主形容詞の基本的な図式は $[A_1, A_2, A_3 \dots A_n] : [N_1, N_2, N_3 \dots N_m]$ であった (§14)。

上述したことからすれば、物主形容詞が短語尾形をとるのも、この豊富な *redundancy* の故に外ならないと考えられる。

従来の説は、対象の定性並びに不定性を両形の選択の基礎と考えていたため、明らかに特定のものとして対象を規定する物主形容詞が短語尾形をとる理由を説明するのに苦しんだ。この間の事情は、ヤクビンスカヤ・レンベルクの所論に典型的な形で現われている。

彼女は *отъ внолеомьскадго граднца, при морн галнленстѣемъ* のような表現における長語尾形の使用を、「ベツレヘムの町」、「ガリラヤのうみ」が明らかに特定のものを示すからであるとしながら、他方 *въ градъ галнленскъ, при езерѣ геннесаретьсцѣ* の如き表現における「ガリラヤの町」「ゲネサレ湖」は明らかに特定のものであって、その語彙的意義のためにこの定性を長語尾形によって「副次的に強調する必要がなかった」¹² という不合理極まる説明を敢えてし、この論理を更に物主形容詞にまでおし広げて、これらの形容詞は「すでにそれ自身対象をあれこれの個人への所属に従って全く具体的な周知のこととして規定し、それ故定性という補足的指標を必要としなかった」¹³ とする。このような見解は単に前後撞着しているのみならず、少しく思いをひそめてみれば容易に察知できるように、長語尾短語尾両形の存在の意義そのものを否定することになろう。従来の定義の欠陥はここにおいても明らかである¹⁴。

¹¹ Н. И. Толстой, Значение кратких и полных форм прилагательных в старославянском языке, *Вопросы славянского языкознания*, вып. 2, М. 1957, стр. 73–74.

¹² Э. А. Якубинская-Ленберг, Употребление кратких и полных прилагательных в старославянском языке. Очерки и исследования по истории языка, *Ученые записки ЛГУ*, No.197, Л. 1957, стр. 108.

¹³ *ibid.*, p. 98.

¹⁴ このような欠陥を鋭くつけたものに、例えば А. Г. Рудневがある。彼は次のように主張する。「対象を常に特定のものとして規定する物主形容詞に長語尾形が欠如していることは、この形式が定性という範疇の指標として使用されるということと矛盾しているのではなからうか。」cf. А. Г. Руднев, К вопросу

§21 しかしながら、この種の物主形容詞において長語尾形が使用されている例も、僅かながら存在する。これは理論的にも可能である。即ち一定の N 、即ち一定の N_p が、必然的に一定の A_q に所属するものとして示され、あるいはかく認識された場合、 A と N は一義的に定まるであろう。

長語尾形が жена「妻」、дочь「娘」、княгини「公妃」等、他の人物との関係を予定するときにはじめて(言語的にも)意義を有し、且つその人物に対し二義的な役割を有しているとみとめられる名詞を修飾する場合、あるいはこれらの名詞を伴わずに、これらを示す場合の何れかの場合に使用されているのは、正にこの故と考えられる。これが殆んど女性を示す場合に限られているのは興味深い。例えば、

а. Въ то же лѣто прѣставися княгыни Всеволожая. 72v

「同じ年フセヴォロド公妃がみまかった。」

б. ...князь пусти к нимъ жены Ворисовую, Глѣбовую, Мишиную 116

「公はボリス、グレブ、ミーシャ(ミハイル)の妻達をゆるし、彼等の許にゆかしめた。」

в. Прѣставися Мъстиславля Христина. 10

「ムスチスラフ公(夫人)フリスチナがみまかった。」

その他としては、княгыни Ярославля (61v, 131); княгыни Изяславля (27); княгыню Герденевую (142); княгыню Михайловую (74); Якимовая Столповича (155); Варвару Гюргевою Олекшиниця (55v); Ярославлеъ Володимирича (30v); Семенова Борисовича (121); Святославлюю (19v) 等がある。Полюжая Городышняя (59) もこれに属するであろう。

男性を表すものは次の一例のみであるが、これも、この節のはじめに述べた一般原理と背馳するものではない。

г. ...идоша новгородъци къ Дрюцьску съ Святославомъ, съ Олговомъ вънукомъ. 44v

「ノヴゴロド人達はオレグの孫スヴァトスラフと共にドリユチスクに征った。」

§22 これに対し、物主形容詞によって他の同種のものから明確に区別される事象を示す場合に、長語尾形が使用される場合がある。この場合には、物主形容詞の特殊性というよりは、長語尾形の定義から直接に説明することができよう。これは複数形の場合に多い。

о принципах употребления именных и местоименных прилагательных в русском языке, Ученые записки кафедры русского языка, Л. 1948, стр. 148.

д. ...и иде въ Русь ставитъся къ митрополиту съ новгородскими мужи
и съ всѣволожими 63

「しかして(ミトロファンは主教に)任命されるためにノヴゴロドの人々及びフセヴォ
ロドの家臣を伴ってルシの総主教の許に赴いた。」

е. ...на томъ победищи Гюргевыхъ и Ярославихъ вои паде бещисла
... 86v

「その戦場で無数のゲオルグ軍及びヤロスラフ軍がたおれた。」

ж. А на Ярославихъ любѣвницех поимаша новгородци кунъ много ...
108

「しかしてヤロスラフの寵臣からノヴゴロド人は多くのクナを取った。」

дѣтии Дмитровыхъ (75) は、これに属するものとも、前節の用法に属するものとも
考えられる。その他 на всехъ грамотахъ Ярославихъ (107, 108, 112v) は「ルシの
法に則って」というほどの意味であり、ヤロスラフの法典を指している。

この用法に属するもので単数に使用されるものは гробомъ княгыниномъ Яро-
славлеѣ Володимирича (130v); съ Ярославимъ пълкомъ (85v); Борисобым
Гавшинича (sc. имѣниемъ) (139v) があるが、これも長語尾形の定義から容易に説明
することができる。

その他 Холопя улица (150v etc.); Людньми конецъ (90v etc.) のように普通名
詞と結合し、全体として固有名詞として使用される場合が若干認められるが、これらも、
長語尾形の機能から当然のことと考えられよう。

以上述べた諸例も、物主形容詞の図式からすれば、何れも $A_q : N_p$ なる手続きによつ
たものであることは明らかである。

結 語

§23 以上述べてきたことから明らかなように、新しい定義は、形容詞がその属する種
類に従って夫々短語尾形、あるいは長語尾形の何れかをとる傾向があることに対して、こ
のような現象を理論的に解明する根拠を与え、また現実にこの理論を応用した結果も頗る
満足すべきものであった。

この論文は既に発表した形容詞の長語尾形と短語尾形の機能に関する論文の補足をなす
ものであり、両形の職能の定義、及び具体的な使用についての詳細は、ここでは触れてい
ないが、この論文で扱った形容詞の種類と、両形の選択との関係に関連して、若干、補足
しておきたいものがある。

§24 性質形容詞に属するもののうち、状態を示すものが屢々短語尾形をとることについては、先に発表した論文で述べたところであるが、この現象を図式から説明すれば、或る事象に属する状態は、これに属する性質と比較すれば、時間的空間的その他の条件への依存が極めて大であり、従って redundancy が大きいということになる。この点に関して興味あるのは **новъ** である。**новъ**「新しい」は、状態を表わす形容詞に属すると考えられるが、その語彙的意義から、名詞との関係は常に「新たに」設定されたものとして示されざるを得ない。事実シノダリ本においては、**новъ**はこの意義を有する場合、例外なく短語尾形をもって現われている。例えば、**церковь нову** (41, 46, 49v, 55v); **городъ новъ** (138v, 155v); **мостъ новъ** (23v, 48v, 154v).

この意義の影響は極めて強力であり、通常ならば長語尾形が期待される箇所にも、短語尾形が使用されている。例えば

a. ... дѣлаша мостъ новъ чересъ Волхово по сторонь ветхаго. 48v

「人々は古い橋の傍にヴォルホフにかかる新しい橋を作った。」

これに対し長語尾形は **новыи торгъ** (20v, 30v, 34, 41v etc.) の外は、新しい貨幣単位「新グリヴナ」を表す場合に一例使用されている (101) に過ぎない。

§25 物主形容詞の図式と関連して興味のあるのは **чюжь**「他人の」の場合である。この語が頻繁に短語尾形をもって使用されているのは、専らその意義によるものと解すべきであろう。

b. кто сбежалъ на чюжю землю, а симъ повеле ... 108

「他人の土地(異国)に逃亡しているものには、かく命じた……」

以上のような、具体的な語彙的意義と両形の選択については、多くの問題が存在している。これらについては、独立の論文において取扱う必要がある。ここでは上に述べて来た両形の職能に関する定義が、このような個々の語彙についても適用することが可能であるということを示唆するにとどめておく。

本稿を終えたあとで *Вопросы славянского языкознания*, вып. 7. 所載のエ・ブラゴヴァの論文を入手した。Э. Благова, К значению и употреблению местоимения *jь в старославянском языке. 時間的に充分検討する余裕を持たなかったが、著者は **ь** が規定語と名詞の間に来る極く僅かな例を検討し、これが写本の誤りとする考えに傾いているようである (стр. 37)。結論として著者は *jь は規定語としては立たず、例外は、形容詞の構成要素となる場合に限られているという (стр. 37, стр. 41)。しかし、形容詞長語尾については従来の説に従っているにすぎず、*jь がこの場合果していかなる職能を有するとすべきかは、また別の問題となろう。